

最果ての寺院にて

吉澤 悟 (当館資料室長)



西方かなたの仏教寺院と言えば、パーミヤンのことは誰でも聞いたことがあると思う。パーミヤン石窟寺院は、新疆やチベットのさらに西、インドの北西部へと連なるヒンドウークシユ山脈の中にある(現在のアフガニスタン)。断崖せまる渓谷に無数の石窟や高さ五五メートルもの大仏(二〇〇一年に爆破)が彫られている光景は、西域屈指の仏教寺院として圧巻である。玄奘三蔵は六三〇年頃にここを訪ねている。「大唐西域記」には、伽藍が数十箇所、僧徒は数千人、一四〇〜一五〇尺もの立仏石像があり、金色に輝き宝飾にきらめくと記されている。大仏は爆破以降の材質調査で六世紀半ばに造立されたことが判明したので、玄奘が目にしたのは八十歳あまりの、大仏にしてみればまだまだ若く瑞々しい姿だったに違いない。パーミヤンはその後まもなくアラブの征服によって大打撃を受けるが、玄奘が記した絶頂期の姿から察して、さらに西方にも仏教が伝わっていた可能性は高い。では、西方最果ての仏教は、寺院とはどんなものだったのだろうか。この夏、念願叶い、ようやくその地を訪ねる機会に恵まれた。

現在知られている世界最西端の仏教寺院は、パーミヤンより北西へ約五五〇キロメートル、カラ・クム砂漠の中にあるメルヴ遺跡である(現在のトルクメニスタン)。同遺跡は首都アシガバッドから車でおよそ四時間。イランとの国境になっているコッペターグ山脈沿いに東進し、カラ・クム砂漠の南端を走るとマリ市に到着する。途中、砂漠の中に二〇キロメートルくらいの間隔で小山が点在していたが、これはシルクロード沿いに営まれた古代の村や町の遺跡である。マリ市の郊外に広がるメルヴ遺跡は、かつてシルクロードの重要拠点であった。ここから西はニシャプール、テヘラン、バクダッド(以上イラン)と連なるペルシア世界。東はプハラ、サマルカンド(以上ウズベキスタン)、そして天山山脈を越えて新疆へと続く。砂漠化した遺跡の周囲は、乾燥と塩害に強いタマリスク(灌木)のほか木々の影もなく、かつてのオアシス都市は見えない。

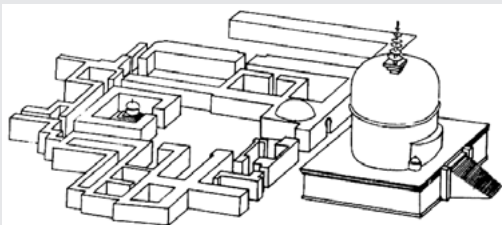


メルヴ出土の片岩製仏像 (5世紀)

メルヴ遺跡は紀元前六世紀、アケメネス朝ペルシア時代にはじまる。その後パルティア時代以降に一辺約二キロメートルの城壁を



メルヴの仏教寺院跡



もった巨大な城塞都市に発展した(紀元前二世紀〜後十二世紀)。最果ての仏教寺院は、城壁の内側、南東隅にひっそり造られていた。一九五〇年代にソ連科学アカデミーのブソン(M.E. Masson)らによって発掘が進められ、一基の大型ストゥーパとその後背に三三の部屋をもつ僧房区で構成されていたことが明らかとなった。当初のストゥーパは小型であったが、幾度も修復され、その度に日干し煉瓦と漆喰が塗り重ねられ、次第に大型化していったという。一九六二年、このストゥーパの残骸中から大型の塑像と、鮮やかな彩色の壺が発見された。この壺は今日「メルヴの壺」と呼ばれ、アシガバッド国立博物館の展示室で多くの人を魅了している。白地に赤いハートマークを散りばめ、男女の出会いの場面から狩猟風景、そして死出の分かれまでを黒や赤、青の顔料を使って描いている。寺院内の生活とは縁遠い感のあるこの壺の中には、実は、白樺樹皮にサンスクリット語で書かれた経典が収められていたのである。最果ての寺院で語られた仏説は、もしかしたら人間一人の生涯に引きつけられた、喜怒哀楽に富んだ「教え」であったかもしれない。壺と経典のアンバランスからそんな想像が膨らむ。東の果ての日本では、鎮護国家を祈り、あるいは「異国の薬師こそめでたかり(薬師寺仏足石歌碑)」としていた。一方、西の果て、ゾロアスター教を国教としたササン朝ペルシアの版図の中では、仏教は異端として細々と、しかしヒューマニズムに溢れるかたちで信者を集めていたかもしれない。

今や日干し煉瓦が砕けて土山と化した寺院跡には、岩肌を穿つパーミヤンのような豪快さはない。僧坊のスケールも「僧徒数千人」の規模は見込めない。しかし、同じ頃、さらに山を越え、砂漠を渡ってここに伽藍を構えた人たちがいる。その、ささやかな息づかいが聞こえるようであった。



同右「死出の別れ」



同右部分「男女の出会い」



メルヴの壺 (5世紀)